

# 井上円了と能海寛

## ——仏教近代化の先駆者として——

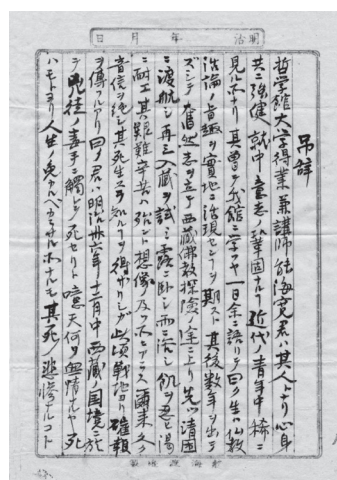
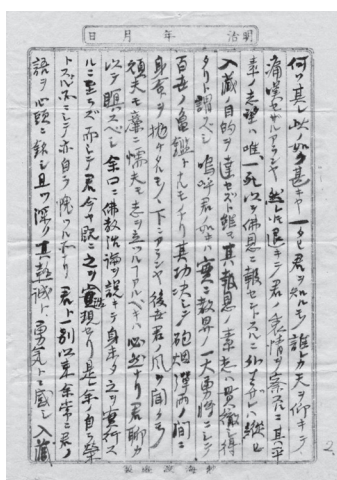
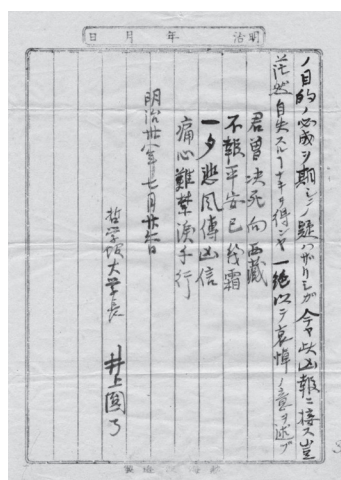
三浦節夫

『東洋哲学』は井上円了が創立した哲学館（現在の東洋大学）の機関誌であるが、1905(明治38)年9月5日刊行（8月は休刊）の第12編第8号で、出身者の能海寛の死去について、つぎのように書いている。

能海寛氏の生死（依然として不明なり）

氏は島根県那賀郡波佐村大字長田真宗大谷派浄蓮寺に生る、京都に出で、西六条の普通教校に学び、後東京に來りて慶応義塾に入り更に哲学館に轉じ明治二十六年七月其の業を卒へたり、同三十一年十一月西藏探検の途に上りしが、三度途を變ずるも尚目的を達すること能はず、同三十四年四月大理府より発信せし者を最後とし、爾來今日に至るも杳として消息を得ず、然るに頃者、同氏死去の報を伝ふる者あり、〔後略〕

これによれば、能海の生死は長く不明になっていたが、すでに死去したとの報があり、これによって1905(明治38)年7月26日に、浅草本願寺にて追悼法会が営まれた。当時、体調を崩していた円了は7月に静岡県に滞在していたので、この追悼法会のために、写真のような吊辞を書き贈っていた。その吊辞を翻刻すると、つぎのような内容であった（句読点、改行、「」は筆者が付けたもの）



井上円了の弔辞

天頂山浄蓮寺蔵、浜田市金城町歴史民俗資料館寄託

のである)。

### 吊辞

哲学館大学得業兼講師能海寛君ハ、其人トナリ心身共ニ強健、就中意志ノ鞏古ナルコト、近代ノ青年中稀ニ見ル所ナリ。其曾テ我館ニ学フヤ、一日余ニ語りテ曰ク、「生ハ仏教活論ノ旨趣ヲ実地ニ活現セシコトヲ期ス」ト。

其後数年ヲ出テズシテ、奮然志ヲ立テ、西藏仏教探検ノ途ニ上リ、先ツ清国ニ渡航シ、再三入蔵ヲ試ミ、露ニ臥シ雨ニ浴シ飢ヲ忍ヒ渴ニ耐エ、其艱難辛苦ハ殆ント想像ノ及ブ所ニアラス。爾來久ク音信ヲ絶シ、其死生スラ知ルコト得ザリシガ、此頃戦地ヨリ確報ヲ伝フルアリ。曰ク「君ハ明治三十六年十二月中西藏ノ国境ニ於テ凶徒ノ毒手ニ触レテ死セリ。」

噫天何ソ無情ナルヤ、死ハモトヨリ人生ノ免カルベカラサル所ナルモ、其死ノ悲惨ナルコト、何ソ其此ノ如ク甚キヤ。一タヒ君ヲ知ルモノ、誰レカ天ヲ仰キテ痛嘆セサルアラシヤ。

然レトモ、退キテ君ノ衷情ヲ察スルニ、其平素ノ志望ハ唯、一死以テ、仏恩ニ報セントスルニ外ナラザレハ、縦ヒ入蔵ノ目的ヲ達セズト雖モ、其報恩ノ素志ハ貫徹シ得タリト謂フベシ。嗚呼、君ノ如キハ、実ニ教界ノ一大勇将ニシテ、百世ノ龜鑑トナルモノナリ。其功、決シテ砲烟彈雨ノ間ニ、身命ヲ抛チタルモノ、下ニアランヤ。後世君ノ風ヲ聞クモノ、頑夫モ廉ニ懦夫モ志ヲ立ツルコトアルベシハ必然ナリ。君聊カ以テ瞑スベシ。

余口ニ仏教活論ヲ説キテ、身未タ之ヲ実行スルニ至ラズ。而シテ君、今ヤ既ニ之ヲ活現セリ。是レ余ノ自ラ榮トスル所ニシテ、亦自ラ愧ツル所ナリ。君ト一別以来、余常ニ君ノ語ヲ心頭ニ銘シ、且ツ深く熱誠ト勇氣トヲ感シ、入蔵ノ目的ノ必成ヲ期シテ疑ハザリシガ、今ヤ此凶報ニ接ス。豈茫然自失スルコトナキヤ得ンヤ。一絶以テ哀悼ノ意ヲ述ブ。

君曾決死向西蔵  
不報平安已幾霜  
一夕悲風傳凶信  
痛心難禁淚于行

明治三十八年七月二十六日

哲学館大学長 井上円了

この吊辞の文章をみると、円了と能海の深い関係を知ることができる。

円了は1887(明治20)年9月に哲学館を創立し、翌1888(明治21)年6月に第1回の世界旅行に出発した。1年間かけて欧米各国を始め、アジアの国々を見聞し、大いに学んだ結果、1889(明治22)年11月に哲学館の新校舎を完成し、新たな視野から教育を行っていた。

能海は、1890(明治23)年2月に慶応義塾予科に入学したが、12月に退学して、翌1891(明治24)年1月15日に円了の哲学館に転入学してきた学生であった。円了は1858(安政5)年生まれ、能海は1868(明治元年)生まれで、二人の年齢差は10歳であるが、ともに真宗大谷派(東本願寺)の末寺に生まれたという共通性があった。

すでに能海は、広島や京都で、真宗や仏教、それに新しい学問であった西洋諸学を学んでいた学生であった。哲学館で円了に会った能海は、吊辞にあったように、自らの志を「生ハ仏教活論ノ旨趣ヲ実地ニ活現セシコトヲ期スト。」と告白している。ここでいう仏教活論の趣旨とはどのようなことを指したのであろうか。

円了は哲学館の創立に先立つ1887(明治20)年2月に、現代では仏教近代化の礎と言われる『仏

教活論序論』を出版し、その主張が仏教界のみならず日本社会一般にも高く評価され、いわゆるベストセラーになっていた。この序論の冒頭にある「諸言」は、当時の円了の問題意識を著したものである。それはつぎのようなものである。

第1に「余つとに仏教の世間に振るわざるを慨し、自らその再興を任じて独力実究することすでに十数年、近頃始めてその教の泰西講ずるところの理哲諸学の原理に符合することを発見し、これを世上に開示せんと欲して、ここに一大論を起草するに至る」ということである。世間から衰退と見られていた仏教の再興を、独りででも成し遂げようと志したのが円了であり、能海もこれに強く賛同したことを表している。

第2に「余が仏教を論ずるは哲学上より公平無私の判断をその上に下すものなれば、世間普通の僧侶輩の解するところと同一にあらず。(中略)余が愛するところのものは真理にして、余がにくむところのものは非真理なり」ということである。円了は仏教界に生まれたから、仏教を信じているのではなく、公平無私の立場から、真理として仏教を愛するのでであると主張する。この主張は、十数年の実究から得た結論であったが、能海も同じ考えであったのだろう。当時の能海はすでに世界中へ仏教を英語で伝道しようという志を持っていたので、円了はこれを聞いて「実地ニ活現セシコトヲ期スト」という表現にしたのであろう。

第3に「今、仏教は愚俗の間に行われ、頑僧の手に伝わるをもつて、弊習すこぶる多く、外見上野蠻の教法たるを免れず。故をもつてその教は日に月に衰滅せんとするの状あり。これ余が大いに慨嘆するところにして、真理のためにあくまでもこの教を護持し、国家のためにあくまでその弊を改良せんと欲するなり。しかしてその護持改良の方法は、当時の僧侶と共にはからんとするも、いかんせん、その僧侶の過半は無学無識、無気無力なるを。」という。円了のこの指摘は、仏教界に生まれた者としてはタブーであるが、しかし衰退の原因を探れば、こう公言せざるを得なかった。こういう仏教界の現状を打破・改良しようという意思は、能海にもあったから、わざわざ学を求めて上京し、哲学館まで来て、円了と語り合ったのである。

第4に「幸い余が微志の存するところを知り、共にその力を尽くして、仏日のまさに落ちんとするを支えんと欲するものあらば、請う、余にその意を告げられんことを。」と、円了は述べているが、能海はまさに円了の同志として現れた人物である。そして、円了は弔辞のように「意志ノ鞏古ナルコト、近代ノ青年中稀ニ見ル所ナリ」と認めたのであった。

能海は哲学館で3年間学び、1893(明治26)年7月に高等科上級を修了している。この年の12月に、能海は『世界に於ける仏教徒』という単行本を、26歳で自費出版しているが、発行書肆として哲学書院、明教社、興教書院とある。哲学書院は円了が経営していた出版社であるから、青年の出世作を認め、協力していたことと考えられる。

その後、能海は仏教の教えを英訳して、世界へ伝道するためには、仏教の原典といわれるチベットの經典の必要性を痛感し、本山の東本願寺に幾度か上申して、1898(明治31)年9月末に東本願寺の許可を得て、西藏探検に旅立つが、1901(明治34)年4月を最後に音信が途絶えてしまう。

その後、円了は1903(明治36)年9月、能海の功績を認め、哲学館大学得業兼講師の称号を贈っているが、弔辞のように、「君ハ明治三十六年十二月中西藏ノ国境ニ於テ凶徒ノ毒手ニ触レテ死セリ。」と認めたのである。円了は漢詩で教え子の能海のことをつぎのように哀悼している。

君曾決死向西蔵	君曾て死を決して西蔵 <small>せいざう</small> に向かふ
不報平安已幾霜	平安を報 <small>しら</small> せざること已 <small>すで</small> に幾霜
一夕悲風傳凶信	一夕の悲風 凶信を伝ふ
痛心難禁涙千行	痛心禁じ難く 涙千行す

(君はかつて死を賭してチベットに向かったが、  
それ以来、何年も無事の知らせを聞かなかった。  
ある晩、風の便りが君の訃報を伝えてきた。  
君を失った心の痛みは堪えようもなく、とめどなく涙があふれ出すのである。)

ここで解説するまでもなく、円了の悲しみは深かったことがわかる。

その後、戦前に能海の業績の顕彰は一度行われたが、やがて忘れられた存在になり、近代仏教史の研究者で能海に触れる者もいなかった。その状況は戦後もなお変わらなかった。しかし、円了は弔辞の中で「後世君ノ風ヲ聞クモノ、頑夫モ廉ニ懦夫モ志ヲ立ツルコトアルベシハ必然ナリ。君聊カ以テ瞑スベシ。」と言っていた。この句は『孟子 萬章下篇』の「頑夫廉懦夫有立志（頑夫も廉に懦夫も志を立つる有り）」であり、現代語訳すれば、「後世、君の真理を追究しようとする学風を聞いた者は、どんな欲深い者でも感化されて清廉潔白な人となり、どんな意気地なしでも皆発奮してきっぱりと志を立てるようになるに違いない。」という意味であった。

円了の予言のように、1965(昭和40)年頃から、ジャーナリストの江本嘉伸氏らによって、探険家としての業績が明らかになり、さらに能海の地元の旧金城町波佐における隅田正三氏、岡崎秀紀氏らによって能海寛研究会が結成されて、能海の業績の顕彰が始まり、いまでは『能海寛著作集』まで出版されるようになった。

円了の哲学館は現在、東洋大学となって、130年を超える歴史を有する日本の主要な私立大学と位置づけられ、2014(平成26)年には文部科学省による「スーパーグローバル大学創成支援」事業に採択された。仏教の世界的伝道者を目指した能海寛は、現代流に言えば、哲学館時代の「グローバル・イノベーター」であったから、将来の東洋大学においても顕彰されるものと考えられる。

(東洋大学ライフデザイン学部 教授)